

富山医科薬科大学

医学部同窓会報

2003. 第12号



富山医科薬科大学
医学部同窓会報

2003. 第12号



C O N T E N T S

4. 挨拶 学長 高久 晃
6. 附属病院長に就任して 副学長(医療担当)兼附属病院長 寺澤 捷年
8. 佐々の富山、前田の金沢 会長 高田 良久
10. 「とやま賞」を頂いて
山形大学医学部泌尿器科 笹川 五十次 (医学科 昭和57年卒)
13. 笹川五十次先生「とやま賞」受賞を祝して
耳鼻咽喉科 将積 日出夫 (医学科 昭和57年卒)
14. 「とやま賞」祝辞 米国NIH癌研究所 実験免疫部門 矢沢 広
15. 特集 “卒業生の今現在、そして将来” Part 7.
吉田 徹 (医学科 平成6年卒)
市山加奈恵 (看護学科 平成14年卒)
松井 文 (看護学科 平成14年卒)
安田 恵子 (医学科 平成10年卒)
蓑 毅峰 (医学科 平成5年卒)
日置 千広 (医学科 平成3年卒)
山野辺 聡 (医学科 平成2年卒)
川口 善治 (医学科 昭和63年卒)
青木 賢樹 (医学科 昭和62年卒)
24. 寄稿 英国留学便り 第一内科 林 龍二 (医学科 平成3年卒)
25. 特集：大学内教室紹介
ウイルス学教室 佐藤 仁志 (医学科 平成6年卒)
和漢診療学講座 酒井 伸也 (医学科 平成元年卒)
整形外科学講座 川口 善治 (医学科 昭和63年卒)
脳神経外科学講座 栗本 昌紀 (医学科 昭和58年卒)
地域・老人看護学講座 高橋 佳子 (看護学科 平成13年卒)
他4名
-

染色工芸家。太平洋美術展・新人賞(1982年)、松吉賞(1984年)、太平洋美術会賞(1998年)受賞。各地工芸画廊をはじめ、日本橋高島屋(東京)、現代工芸藤野屋(栃木県佐野市)などで個展を開催している。また、1994年とちぎの美術女流作家100人展にも選ばれる。1999年銀座松屋にて個展を開く。いずれも好評を博す。栃木[蔵の街]音楽祭協力委員として地域文化活動にも貢献。縁あって本同窓会誌の表紙絵を1997年より依頼している。栃木県岩舟町在住。

-
37. 看護学科開設十年記念事業
看護学科開設十年記念実行委員長 田澤 賢次
38. <定年退官寄稿>
医薬大と共に歩んで 解剖学第二講座 高屋 憲一
40. 看護学科の開設10年を顧みて
人間科学・基礎看護学講座教授 高間 静子
43. 退官雑感
看護学科 母性看護学助教授 堀井 満恵
44. 寄稿 北への道 ノルウェー便り
University of Oslo, Department of Biology 太田 昌一郎 (医学科 平成4年卒)
46. ボランティア・オーケストラ「杉谷の森合奏団」の歩み
麻酔科学助教授 団長 廣田 弘毅
47. 附属病院ロビーコンサート
医薬大附属病院放射線科 野村 邦紀 (医学科 平成元年卒)
49. 第54回 北陸地区国立大学体育大会
第54回 西日本医科学生総合体育大会
50. 平成14年度富山医科薬科大学関連病院長懇談会議事要旨
54. 富山医科薬科大学医学部人事消息
55. 平成14年度 第21回医学部同窓会総会議事録
58. 平成13年度会計報告・平成14年度収支予算案
平成14年度行事報告・平成15年度行事予定
60. 職掌分担・評議員一覧
62. 編集後記

はじめに

国立大学の特殊独立法人化も残すところ約1年となりました。母校富山医科薬科大学でも大きな構造改革に取り組んできています。その中の一つに、教職員の任期制導入がほぼ決定しました。本校においてその対象となる人物はほとんどいないと思われませんが、大学の活性化を図ることが文部科学省の狙いです。また、新しい研修医制度のスーパーローテートも来年度から開始され、附属病院ではその対応に追われています。どれも大学職員にとって大きな負担となっていますが、より良い(と思われる)システム構築に向けてベストを尽くしています。しかし現実問題として、職員の数が増えるわけでもなく、ただ単に負荷だけが増えている状況ですので破綻をきたさないか心配です。そこではさらなる効率化が求められています。

富山医科薬科大学における統合・再編問題の最新情報については学長の挨拶をご拝読ください。また附属病院の独立法人化への対応については、附属病院長の挨拶をご拝読ください。(編集者)



挨拶

学 長 高 久 晃

富山医科薬科大学医学部同窓会会員の皆様、夫々の職場で医薬大卒業生の誇りを忘れずに頑張っておられる事と存じます。

富山医科薬科大学は、今かつてない荒波の中におり、執行部、部局長、評議員を中心に、その対策に没頭している毎日であります。御承知の如く、全国の国立大学の法人化については、平成15年春の通常国会でその事が審議され、通過すれば、平成16年4月から一斉に法人化されます。一大学一法人という原則で、法人化の学長には、国立大学下の学長に比べ教学関係のみならず、経営面での大きな責任が生じてきます。その際の国立大学法人運営費交付金の算定基準や中期目標の項目、決裁事項が既に文部科学省から各大学に示される等、事態は大きく変わりつつあります。国立大学法人富山医科薬科大学となる日もそう遠くありません。それに加え、昨年6月の遠山プラン「国立大学の再編・統合を大胆にすすめる」に沿った動きも、全国規模で急ピッチで進められ、新設医科大学もその地域の国立大学との統合が決まったものが10組を数えており、富山地区は一步遅れをとっている事も事実です。

特色ある富山医科薬科大学の研究パワーを統合によって埋没させる事なく、更にパワーアップの引き金にするという戦略の中で、本学は富山大学、高岡短期大学と交渉を続けてきました。26年前に薬

学部が別れてきた富山大学、さらには高岡短期大学を含めた統合はいわば直径が夫々大、中、小とバラバラで、素材の違う3つの車輪を使って動く車を作るのに似ています。この点、他の地域に見られる様な規模が殆ど同じ2大学の再編・統合とは比較にならないほど複雑さが伴い、解決すべき問題は幾何級数的に増えてきます。その中で本年3月、3大学で再編・統合にあたっての基本的確認事項(別文)を設定し、それにしたがって新大学構想協議会で意見をつめております。また一方、富山、石川、福井の北陸3県の7国立大学は、夫々の県での再編・統合とは競合しない形で教育、研究、医療の面で連合していく方向について各学長は同意しています。

国立大学法人化や再編・統合には、日本経済の低迷に加え、既に始まった少子化現象がそのバックグラウンドにあり、「天の声」とも言える「国立大学の改革の方針」に沿って、避けて通れない歴史上の岐路に立っております。本学の特色を埋没させず、更に発展させる観点から法人化や再編統合に立ち向かっております。医学部同窓会会員の御支援、御助言をこの紙面を借りてお願い申し上げます。

別紙

富山県内国立大学の再編・統合にかかわる基本的確認事項

1. 新しい大学の基本理念について

新しい大学は、地域と世界に向かって開かれた大学として、生命科学、自然科学と人文社会科学を総合した特色ある国際水準の教育及び研究を行い、高い使命感と創造力のある人材を育成し、地域と国際社会に貢献するとともに、科学、芸術文化と人間社会の調和的発展に寄与する。

2. 教育研究においては、以下のことが重視される必要がある。

- 1) 生命科学を中心に関連分野を融合した国際水準の大学院の新設
- 2) 質の高い教養教育とそのための責任ある実施体制の確立
- 3) 時代・社会の要請に応える人材の育成とそのための学部・大学院の編成
- 4) 地域産業との機能的連携、及び地域社会への知的サービスの提供

3. 1.及び 2.を達成するために、従来の制度・慣習にとらわれず、評価を重んじる管理運営体制を確立し、その下で次のような管理運営を基本とする。

- 1) 教育研究のあり方と社会的貢献に応じた教職員の配置
- 2) 教授、助教授、講師、助手などの教員の構成の適正化
- 3) 教育・研究・社会的貢献等に対する適切な評価
- 4) 評価に応じた人的、物的資源の配分
- 5) 全教員に対する任期制の採用
- 6) 評価に応じた給与体系の構築

平成14年3月26日

富山医科薬科大学長

高岡短期大学長

富山大学長

富山県内国立大学の再編・統合の推進に関する合意書

富山県内に設置されている国立大学3機関、すなわち富山医科薬科大学、高岡短期大学及び富山大学は、相互に特色を尊重しつつ、再編・統合を推進し、新しい大学の創設に向けて協議を行うことに合意する。

平成14年3月26日

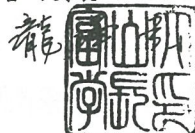
富山医科薬科大学長



高岡短期大学長



富山大学長



附属病院長に就任して

副学長(医療担当)兼附属病院長 寺澤捷年

私は平成14年8月1日付で附属病院長に就任致しました。何卒宜しくお願い致します。この原稿を記している11月で約3カ月。まだまだ病院全体を把握しておりませんが、独立行政法人化へ向けて、病院の体質改善を一歩一歩進めております。

平成16年4月から、全国全ての国立大学は独立行政法人に移行します。これによって、全ての職員は「非公務員」となることも決定しています。それでは大学が全て「国」から「独立」するのかというと、そうではありません。当分の間(と私個人は理解しています)、現在の職員の給与、退職金、様々な運営費用は国庫から「運営交付金」として給付されます。

私の個人的見解として「当分の間」とする理由は、国民のニーズの多様化と少子化時代を迎えて、現在の内容と規模のままの国立大学が存立し得るのか否かを考えれば、結論は明白です。大局的に見れば、規模は縮小の方向に向かうのは当然でしょう。従って、今後は大学自身が構造改革を余儀なくされます。その過程において厳しい社会の評価を受け、個々の大学について言えば、運営交付金はその評価によって縮小したり拡大したりすることは当然予想されます。場合によっては縮小整理される

こともあるでしょう。

今、富山県内の3つの国立大学、すなわち、わが校と富山大学、高岡短期大学の統合が真剣に論議されています。統合の可能性を探る協議会はすでに18回開催されています。この統合問題については様々な立場から、様々な意見が出されています。私の個人的な見解は何故「国」が大学を「独立行政法人」とするのか。この文脈の中で方向を決めなければならないということ。そして、統合は教官や職員の既得権の擁護のために為されるものではなく、よりよい教育と研究を目指すべきものであると、言うことです。

独立行政法人化と統合の問題を抱えてはおりますが、附属病院のスタンスははっきりしています。この時局に当たって、病院長の仕事、あるいは責務を私自身は次の8項目であると考えています。

1. 患者さんがアクセスしやすい病院であること。
2. 患者さんの病院に対する信頼度と満足度が高いものであること。
3. 診療内容が高い水準を維持していること。
4. 病診連携・病病連携が円滑に行われる病院であること。
5. 学生・研修医にとって内容が豊で、高い水準の教育が確保されていること。
6. 臨床的研究を推進するための環境が整備されていること。
7. この病院の運営に参画する全ての職員にとって、働きがいのある、楽しい職場環境であること。
8. 病院経営が財政的に健全であり、新たな資本投下が可能な状態であること。

この8項目の目標に向かって邁進する限り、独立行政法人化はむしろ歓迎すべき事柄であると言えます。その最も端的な例は、国家公務員総定員法で縛られている人員の規制が外れるわけですから増員も夢ではありません。また、運営交付金の漸減という事態がもし起こっても、これに弾力的に対処出来るのです。

この文脈の中で、私は長年懸案であった、外来患者さんの駐車場に有料ゲートを設置することを決断しました。その理由は外来患者さんの為とされている駐車場に学生や職員の違法な駐車が恒常的になされており、患者さんからの苦情が毎日寄せられているからです。この病院は市街地から離れており、地理的にアクセスしにくい宿命を背負っています。車で来院された患者さんが容易に駐車できるスペースを確保することは当然のことではありませんか。誤解の無いように申し添えますと、この有料駐車場は受診患者さん、付き添いの方々は無料になる仕組みです。

また、リスク・マネジメントにも積極的に取り組んでいます。如何に高度な医療を提供出来たとしても、万に一つでも事故があってはなりません。信頼される病院とはなれないのです。このリスク・マネジメントを通じて、患者さんへの接遇の改善、そして緊張感を持った医療活動の展開が為されて行くものと期待しています。

どうか、同窓会会員の皆様には今後とも宜しくご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

佐々の富山、前田の金沢

会長 高田 良久

3歳になる長女が、バスタオルをくるりと羽織って風呂場から駆け出してきた。ぺたりと座ると深々とお辞儀をし、顔をあげるや、ニコリ笑ってこう言った。

「まえだのまちゆでごじゃりましゆる」

ここのところ、わが家はちょっとした戦国ブームに沸いている。

10歳になる長男は「ハリー・ポッター」にも夢中だが、富山の友人に買ってもらった「利家とまつ」の小説本も再読三読したようで、江戸東京博物館で催された「加賀百万石物語展」に連れていったら、利家の遺品、蒔絵朱鞘を模したキーホルダーをせがまれた。

そんな彼だから、最近「書写」などと言い換える書道の時間に、自由題でと言われ迷わず「天下布武」と書いたらしい。

はじめは批判の声もあった2002年のNHK大河ドラマ「利家とまつ—加賀百万石物語」だが、20%前後の視聴率に支えられてか、後には、むしろ賛辞をきいた。このドラマには、子供の心をもとらえる、「何か」があるのだと思う。

今に残る佐々堤を築き、現代でも困難な厳冬の立山「さらさら越え」という空前絶後の難事業を敢行した富山城主佐々成政。しかしその生涯はむしろ不遇といえよう。府中三人衆と並び称されながら、徳川の世までも営々と生き延びた「加賀の前田」とは好対照だ。

中沖豊富山県知事は、2002年11月4日の讀賣新聞で「オンリーワンを育てる」といった。「前田家の保護のもとにさまざまな封建的特権により保護された金沢の町人と、自分の知恵と才覚でのしあがっていく富山の人びととのちがいを」《「県民性の日本地図」(文春新書)》を示す決意ではあるまいか。折もおり富山中部高校出身の田中

耕一さんがノーベル化学賞に輝いた。400年あまり昔の、佐々の気骨は今も脈々と生きているかのようだ。

家康を天敵といった「前田のまつ」の加賀藩本郷下屋敷跡に、徳川幕府が創立した開成所をひとつの祖とする東京大学があるのも因縁だが、それなら、佐々の富山の医科薬科大学からノーベル医学生理学賞受賞者がでて不思議はあるまい。

「街角のエッセイスト」（北日本新聞開発センター刊）に、「一心精進。富山には人を育てるそんな空気がある」と書いた。それは佐々の昔から前田の支配を経て、今なお生きる富山の気風なのだろうか。

追記：先日、富山医科薬科大学混声合唱団「アンサンブル立山」のトレーナーで、不肖私が脈を取らせていただいている竹澤勤先生から、同団の第23回定期演奏会のパンフレットをいただいた。

驚いたことに、そこには、元埼玉県副知事で富山県立山町出身の坂東真理子さんが、次のように書いていらした。

「…ハデになり、カッコよさを求めるなかで失われつつある『まともな生き方』が、田中さん（ノーベル化学賞の田中耕一さん）のなかに残っています。田中さんもそれを富山の風土から身につけたといっています…富山的マジメさや努力はやはりではありませんが、人間として失ってはならない宝です」

「街角のエッセイスト」の拙文「帰るところ」には、

「…自分の感覚を鍛え、高い志をもって素朴に真面目に具体的に取り組み、と富山の人と風土に仕込まれたような気がする。当たり前のようにでいて、そう信じ、そう生きる人が多くなれば、決して当たり前にはならないことを、最近私はつくづく思う。天災や戦災、流行や風潮に人は左右される。しかし、富山の人々は利那主義の虚無に陥るような仕方では記憶を立ち切りはしなかったのだろう」

と書いたのだった。